

正札附

長唄

全詞章

杵屋六三郎 述

本名題「正札附根元草摺」

草摺引物・曾我物

それ磯山おほふ雲霧や、ただ引幕の初霞、蹴やぶるせいは鳴瀧を
登る鯉龍の如くにて、曾我の五郎時宗は

逆沢潟の重鎧、軽げに提げ駆け出すは

目ざましくも又見えにけり、裳裾にしつかり小林が

手を懸烏帽子鶴の丸、左右の髭に天津風、くもなくやらじと力量に、引けども引けども
動かばこそ、時宗笑つて振離し、いらぬ腕立よしやその、力あるともそりやゆかぬ、

仁王立なる勢は、草木もなびく鬼神や

鬼をあざむく小林も、今は心を和らげて

これ申し

野暮な力は奥の間の、浮気らしきのしんき節、女子の愚痴な真実が、届かぬことか待つ夜半も

蒲団重ねて敷妙の、枕の土俵化粧がみ

間夫に逢ふ夜の力水、もらさぬ仲の文ずまひ

人目をせきのうき思ひ煙草は憂さを忘れ草、煙比べん不二浅間、そつと覗いて、オオ

その顔はまあ憎らしやと、言ふては又も取付いて、ゑいやゑいやと引けども

押せどもこりやどうぢや

朝比奈力はそれきりか

ムムエエ髭が試しの力瘤、落しやせぬかと撫廻し、引くに止らばこらへて見よ、モサモサモサ

べつそく踏しめ時宗は、時こそ来れ嬉しさよ

河津の声も身にぞ知る、今や遅しと夢の間も

忘れぬ父の仇敵、討たんずものと飛上がり、走り行かんとする所を、又もやらじと

引留る

これまつた、留めてとまらぬナ、無理酒に気強い朝のひざり言

何じやいな置かしやんせ

肩に手拭そめも構はぬ江戸自慢

かまいますめうでんす、派手な処がわしや嬉し、エエとまらんせ

勇ましや

互に争ふ勢は、前代未聞当世無双、後代無二の評判は、東に並ぶ二見潟

ここにうつして神風や、恵も深く若者と、貴賤上下おしなべて

恐れぬ者こそなかりけり